

# 有識者、少年消防クラブ 指導者の助言等

## 少年消防クラブ活性化推進会議専門委員 鈴木 幸平

常葉大学外国学部教授

## 熱い思いと直向きさ

消防事業そのものには疎い私ではありましたが、この10年間、少年消防クラブ活性化推進会議への出席の機会を得ることができました。消防団の装備をもっと充実させ、団員・クラブ員を十分に確保するために、本協会及び各少年消防クラブの在り方について、学校教育現場からの視点で発言させていただきました。多くの方々のお陰で、一例ですが「消防団を中核とした地域防災力の充実強化に関する法律」(平成25年制定)の具体策として、各地区の運動部やスポーツクラブに所属している一般の中高生が幅広い消防防災訓練へよりスムーズに参加できるよう、制度的な後押しをすることとなりました。そのような小さな見直しであっても、本協会職員の皆さんが、いつも長期的展望と熱い思いを持ち、具現化されていったことに、あらためて敬意を表したい思いでいます。

また、ヨーロッパ青少年消防オリンピック、少年消防クラブ全国交流大会、同クラブ指導者研修交流会などへも同行させていただきました。そこに参加された団員の方々の行動には地道に一つのことに命を賭して取り組もうとする献身的な直向きさを垣間見ることができ、頭が下がる思いがしたことを今でも印象的に回想しているところです。

どのような組織や事業でも、組織そのもの見直しやその構成員の意識改革を図ろうとすると、大方の人が総論では賛成するものの、各論に入れば前年度踏襲となる傾向が強い。とりわけ、大きな組織になればなるほどその見直しは、壁が高く、厚いものとなることが多いようです。これまでその組織に深く関わってきた人から見れば、ある種の違和感を懐くのは人の常であり、まして、新規参加者が事を起こそうとするとおさらのこととなるわけです。

しかし、そんな中であっても、抜本的な改革を推進しなければならない時があります。その場合、次のような3つの段階を踏むようです。まず、改革案を出すと、最初の段階として「そんなこと、できっこない」とほとんどの人に笑われる。けれども、そう軽くあしらわれても、なお、その改革の意味をしつこいほどに何度も説いていくと、その笑顔がだんだん豹変して「いったい何を考えてるんだ!」と恫喝、激怒される。それが第2段階。しかし、それでも、さらに諦めないで真義を伝え続けていくと、少しずつではあるがその具体的手順や方法すらも理解されてくる。そして、最初は反対していた方からも「ああ、俺が言ったとおりになって、よかったじゃないか」と肩を叩かれるようになる。一定の時間が経つと、やっと多数の方々に承認される。No Pain, No Gain. の極みである。これが完了形の最後の第3段階となるようです。

以前から私淑している安岡正篤師の言葉に「自立自修」があります。理想精神を養い、信ずるところに従って生きようとしても、なかなか人は理解してくれない。多くの方は往々にして反感を持ったり、軽蔑したりする。そういう環境の抵抗に対して、人間が相当できていないと情けないほど自主性・自立性がなくなり、自分自身の気持ちが外の力に支配される。けれども、本当の学びを続け、自らを修めれば、そして自らに立つところ、養うところがあると、初めてそれを克服していくことができると教えてくれています。

これまで、ご理解とご支援をいただいた多くの少年消防クラブ関係者の方々に深く感謝するとともに、全国の各クラブが今後さらに発展することを期する次第です。

# 少年消防クラブ活性化推進会議専門委員 長谷川 祐子

リスクコミュニケーター

## 災害時、実践的サポートトレーニングの勧め

### 世界中の少年、少女消防クラブは？

少年、少女消防クラブは世界中で展開されています。欧米では現在各地で消防署がメインとなり様々な活動が実施されています。幼稚園から18歳までの子供達を地域社会のなかで育て、地域の未来の防火・防災力を支える大人になってもらうという試みです。又、近年では将来の消防士を育成するためにティーンエイジ（12歳から18歳まで）を育てるユースクラブが沢山見られます。日本ではBFC（Boys & Girls Fire Club）は幼稚園から小学校が多く、中学生になると活動を他へ移す青少年が多く、高校生にいたっては殆ど見られない状態となっています。



ジュニア消防クラブ



研究会



Disaster Action Kids

**災害国日本の中で少年消防クラブは重要性が増してきています**

2011年の東日本大震災後、日本では地震や火山活動などの地球内部の活動により多くの被害が出ています。また温暖化により海水温度が上昇し、偏西風などの蛇行を生み出し

その為前線の停滞や台風の巨大化など深刻な状況を生み出しています。

そのような事を学習する機会が、学校では中々時間が取れていません。少年消防クラブの座学の中にそのような事を入れていくことは必要です。やはり最新の知識と技能と技術こそが減災には欠かせないのです。



東日本大震災



熊本地震

### 専門家がクラブ内にいない

そういう声が聞こえきそうです。でも子供たちによる情報集めから始めればよいのです。子供たちは新聞の切り抜きをして、図書館に行って本を借りて情報集めをしてきます。それを自分達でまとめます。そして仲間内での発表をします。このような事を続けていくと次のステップへ行く事ができるようになるのです。

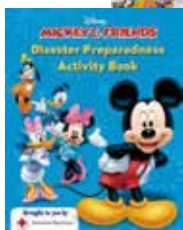
若い頭脳は驚きの発展を遂げていきます。ファーストステップは広報力をつけるため、クラブ内や消防士さんたちへの発表会です。最初は情けないくらいの小さな声ですが、あつと言う間に声が出せるようになります。スイッチをいれるのは指導員である皆様です。



図書館での調べ



災害に備えて



発表会

### より実践的な訓練をどうやって身につけてもらう？

近年、心肺蘇生を教えるクラブが多くなっています。消防署も積極的に住民へのクラスを届けています。とても良い試みです。でも消防クラブ員には応急手当を年に一度教えるようにしてほしいと思います。

身体の仕組みを理解して、細菌（ばい菌）、ウイルスにどう対応していくかを学んで欲しいと思います。ここでも知識があるかないか、技術を持っているかないかが重要なカギになってきます。

ケガをした時、血が流れます。血の中にある血小板が傷に集まってきて（かさぶた）になります。白血球も同時に外からの細菌と戦います。それを知っていれば手当前に傷を水で洗う事の大きさが理解できる。という具合です。

これも研究テーマとしてクラブ員に手渡してほしいです。中学生たちが調べて、クラブ

員との話し合いで発表するのも良い事です。もし予算があれば100円ショップで救急グッズを購入して傷の手当てや包帯の巻き方を救急隊員から学べると楽しいですし、内容のあるクラスになります。クラブ指導員も復習を兼ねて一緒に学ぶといいですね。

### 災害時のケガの手当てのやり方

過去何年にもわたって注意が呼びかけられているのが、東日本大震災や阪神大震災クラスの首都直下地震、東海地震、南海トラフ地震などの地震です。

毎回、私たち住民の被害は恐ろしいものです。亡くなる方ばかりでなく、ケガをする人達が沢山います。災害の時のケガは衛生上の事も重なり重症化するものも多いです。でも残念ながら災害現場にはお医者さんはいません。いつものお医者さんは大災害時、医師会により災害病院に集められ重傷の人達の手当てにあたるからです。少年消防クラブのクラブ員は応急手当を学んでいれば、自宅や近所





の人たちの手当てをできます。これは大きな力です。又自分の身の守り方も一緒に教えます。

例えばケガの手当てをするときは必ずラテックス手袋やビニール袋を手にはめて、人の血が自分に付かないように守るなどです。止血法なども教えていきます。

### 災害時の救助法を学ぶ

今年の夏、私は少年消防クラブの子供達(小学生)にクリビング救助法(写真参照)を使用して、大震災の時一番頼りになるお父さんが筆筒の下敷きになったら?という状況を設定して、訓練を行いました。

クラブ員である小学生がお母さんや兄弟姉妹と一緒にお父さんをクリビングの理論を使って助ける訓練を実施しました。クラブ員の子供たちは驚くほど真剣に、そして積極的に取得しようと学びます。

子供たちは物を持ち上げるため“てこ”を使用することも初めて知ります。支点を作ることもわからない状態から4人ほどで協力してぬいぐるみを助け出します。クリビング部材は自宅にはありませんので、皆でなが代用品になるかイメージさせる訓練も行います

し、実際に本を使用してみたり、モップの棒やゴルフクラブを使用したりして訓練をさせることも教えます。

大震災が起こった時、戸惑うのは大人ばかりではありません。子供もそうです。そして何もできないと分かった時、人間は苦しい状態に置かれます。

大事な人が下敷きになって無力な自分は何もできない。

大勢の日本人が過去の大震災の度にそのような状況に置かれました。ならば少しでも知恵を技術を与えたいと心より思います。

### 指導員のみなさまへ

子供たちの力は大人が思っているよりも大きいものです。今まで考えたことのない訓練でも実際に子供たちの力を知っている指導員が指導していけば、取得することができます。

実際に非常時、行動できることが出来るようになる知恵を、技術を与えることが彼ら自身の危機管理能力を高めていくのです。

ご自身の体調やお仕事などがありますでしょうが、意義のある仕事に従事しておられます。ご一緒に頑張りたいと思います。



クリビング法による救助の様子

## 札幌市富丘少年消防クラブ 小林 環

### 「少年消防クラブ未来に向けた提言書づくり」から…更なる未来

平成27年10月札幌市では「幼年・少年消防クラブ設立30年記念式典」を開催し「仙台市消防クラブ」と映像を介してのメール交換等も行い盛大に終了しました。平成28年現在札幌市内少年消防クラブは50クラブ、クラブ員920名程、指導者300名以上。10年前から比べるとクラブ員、指導者ともに大きく減少。「活動休止クラブ」も出るようになり、今後に向け現状認識と課題解決のための「場と時間」が必要になってきました。

そこで市内50クラブ指導者代表および事務局と情報連絡会を設置し何度かの情報交換の時間を経て平成28年3月「消防クラブの未来に向けた提言書」を作り上げました。

諸課題につき「地域」・「クラブ」・「消防」が其々の立場で「より良いクラブ運営と活性化」をめざし未来に向け提言としてあらわしたものです。

内容を抜粋…

① 少子化に負けないクラブを目指して！…  
○区内外に関わらず複数のクラブが合同で活動・研修をする。○活動と共に「クラブ」をPRできる地域行事に参加する。○クラブの周知勧誘は小学校低学年を重点的に行う。○「消防クラブ」だからこそその体験や卒団後のメリットを示す。

② 指導者のレベルアップを目指して！（指導者不足の現状も含め）…  
○経験の少ない指導者の為「指導者マニュアル」を作る。○高校生・大学生・消防団員を指導者に、学校教諭を顧問等をお願いする。○指導者同士のコミュニケーションの場を多くする。○地域青少年育成部への働きかけをする。○「指導者養成講座」を地域で実施する。○保護者同士の交流と、活動への積極的参加を促す。

③ クラブの認知度を上げるために！…  
○行

政広報・地域広報・新聞・TV・ラジオへの働きかけをする。○駅や地下歩行空間でのPR動画やPRブースの設置をする。○こどもが興味を持つ募集ポスター作り。○「教えて！ファイヤーマン」（小学生向け授業）や「ジュニア防火防災スクール」（中学生向け授業）でクラブについての説明を積極的に行う。

④ 魅力あるクラブ活動を目指して！…  
○防災宿泊・冬の震災体験の実施を行う。○年に1度全市的な行事を実施する。○消防関係の「資格試験」・「消防マイスター」等の検定を実施する。○防火防災の座学を企画。○クラブ員からのアンケート調査（何がしたい）の実施をする。○札幌市「モデルクラブ」を選定しモデル的指針を実施する。○クラブ員の活躍の「場」づくりを積極的に行う。○他クラブへの視察・情報交換を活発に行う。○学んだ事・習得した事の「評価の仕組み」づくりを行う。○消防の外郭団体（消防団・防火委員会等）の傘下とする。

⑤ 準指導者の活躍できるクラブを目指して！…  
○準指導者独自のプレミアム感ある研修・行事を実施。○修了者に対して修了証等のインセンティブを与える。○別途「準指導者育成」の仕組みづくりの構築。○準指導者自らが企画をした活動を実施。

ちなみに…上記提言書をもとに早速消防が動きました。全区指導者の意見を反映した「指導者マニュアル」を新しく作りあげ、3月末までには、市内全クラブに届き「研修の資料、手引書」として使われる予定になっています。

「消防クラブ」は何のために、誰のために、必要なのか？

「明確な目標と確実な成果を」…消防クラブ頑張りましょう！！

# 岩手県葛巻町小屋瀬少年消防クラブ育成会事務局 中山 優彦

## 会長の思いを引き継いで

小屋瀬少年消防クラブ育成会事務局の前任者で、現在は育成会の会長代行を担うと共に葛巻町長を務めておられる鈴木さんから「事務局だけど明日から中山君やって！」と不意に事務局の命を受け、早9年の年月が過ぎてしまいました。社会全般が高齢化を迎える中で、我が育成会も人ごとではなくなってきた感が否めません。名誉会長である土谷さんは昭和一桁生まれの現在85歳、一昨年あたりまでは行事を休むことなく参加頂いていたのですが、最近「今度のあれ、頼むよ！」と徐々にイベントから遠ざかり寂しい限りですがこれもまた仕方が無い現実です。このような中、土谷会長も1年のうち何度かイベントに参加頂くのですが、イベント冒頭での子供たちへの挨拶がぶれることはありません。一つ目は、「皆さん、おはよう！あれ、ちょっと元気ないな。元気よく挨拶しなさい！おはよう、こんにちは、さようなら、誰にでも恥ずかしがらずに挨拶しないとだめだよ。」と先ずは挨拶の指導です。二つ目は、「みんな何事も積極的に行動すること！ほかの団体の子供たちがテキパキ行動しなくとも小屋瀬の子供達は積極的だと言ってもらえるようにちゃんとしなさいよ！」と一喝。そして三つ目は、「話をしている人の言うことをちゃんと聞いて行動すること。ちゃんと話を聞いていないと、“山であれば”一人おいて行かれるぞ！」以上、解りましたかで話しが終わり行動開始です。最近では会長が欠席の時など私が代わりに挨拶をしますが同じような挨拶になり、これも然り長年聞いているから自然と頭の中に記憶されているんだと感心します。最近、私も50歳になり（早い！気持ちは未だ30歳半ばのような気がしますが…）、この節目に改めて“土谷会長の三つのこと”を分析してみると、なるほどと何度となく感心させられます。その私なりの分析を紹介し

てみます。

挨拶：どのような社会においても欠くことの出来ないコミュニケーションの最たるもの。この大事な部分をないがしろにすると人間関係がうまくいかず情緒不安定になり、精神的にも肉体的にもダメージを受けます。要は明るく挨拶を交わして、話さなければならぬことはしっかりと話をしろということなのかなと。

積極的な行動：積極的に行動する人を悪く思う人はいないし、積極的に行うということは未知の世界を切り開く勇気が伴わなければならないこと。勇気を出して積極的に行動することは自然と自信が持てるようになり、行動ある人には自然とそういう人について行こうとするし、助けてあげようとする心理が働きますよね。こんなところかな？

人の話を良く聞け：一つの組織の中で人の話を聞かずに行動するという事は、どのようなことを招くか。そのとおり、何をすべきかを理解していないことは、当然のごとく何をやればいいのか解らず勝手な行動を取り、そこにはいろんな意味で大きなリスクが伴うということ。だから人の話をしっかりと聞いて理解したうえで行動することは非常に大切なことかなと。

私なりの解釈で恐縮ですが、簡潔にまとめると“当たり前のことを当たり前に行く”ということは、簡単なようで実はとても難しい深いものがあると、今50歳になり恥ずかしながら、しみじみと感じるこの頃であります。振り返れば、私が入団したのが今から38年前、ずっと土谷会長の話を聞いてきたので、言われる言葉がどこかに浸透しているものであり、この3箇条をこの先もクラブの教訓として語り継ぎ、そしてこの先も長きにわたり語り継がれることを祈りたいと思います。

# 宮城県南三陸町立歌津中学校少年消防クラブ

## 教論 及川 敦

本校の防災教育の取組は、そのすべてが全校生徒で組織する「歌津中少年防災クラブ」の活動として位置付けられています。

本組織は、震災前にその結成が検討され、平成23年度4月にスタートを予定していましたが、東日本大震災が起これ、その発足が危ぶまれました。震災の際、本校体育館には約800人が避難し、その年の8月11日まで避難生活が続きました。生徒たちはその間、自分たちにできることを精一杯行いました。

しかし、もっと役立ちたいという思いをもって避難所生活を送っていました。そういう生徒の思いが、震災後に改めて「歌津中少年防災クラブ」を発足させようという力になったことは確かであると思います。

このようにして発足した歌津中少年防災クラブの活動(防災学習)を支えていただいているのが、歌津中学校の防災教育を支援することをねらいとして発足した歌津中学校区防災教育協力者会議です。教職員が転勤をし、人が入れ替わっても地域の方々や消防署、また町役場等のメンバーで構成される本会議は、継続して歌津中学校区の防災教育に携わっていただくことができるものと思います。

平成29年度には、歌津中学校区防災教育推進委員会へと組織を発展させ、本組織を中心として、地域の防災の取組をより推進していきたいと考えています。

1学期の規律訓練から始まる各種訓練を、統合したものとして位置付ける本校防災教育の最も大きな活動である「避難所運営訓練」は、1年間の防災学習で得た防災に関するス

キルを実際の災害を想定した場面で使うことができるかどうかを演習によって試すこと、また将来どこで生活することになっても、災害にみまわれたときは、自らの命を守り、地域の一員としての役割を主体的見つけ、果たすことができることを目的としています。ほとんどの教職員は避難民として参加し、生徒の安全面に関すること以外は口出ししません。避難所の開設から救護所の運営、水の確保に昼食の炊き出し、消火訓練にけが人等の手当など、適切な判断力が求められます。生徒たちは状況を把握し、考え、判断して行動します。もちろん失敗もありますが、それも大切な体験です。

また、事前・事後活動を重視しています。事後の振り返りでは、話し合い活動を行い、自分と学校全体の成果と課題を共有します。平成26年度から防災教育の年間計画を再編成し、全校で実施する体験的な活動に加え、学年テーマに基づいた学年ごとの学習を新たに加えました。これまでの防災教育を継続するとともに、より発展させていきたいという生徒・教職員の思いです。本校の防災教育は着実に伝統になりつつあります。伝統をしっかり受け継ぎ、これを持続させるためにより発展させていきます。また、いかに普段の生活の小さな安全が大切かを、これからも生徒とともに学び実践していきたいと思っています。



## 埼玉県三郷市少年消防クラブ 指導者 五十嵐 敦

三郷市少年消防クラブは、子供のころから消防・防災に関する知識と技能を習得し、生命と暮らしを守ることの大切さを学ぶとともに、規律や防火マナーを身につけ、将来の地域防災を担う人材として地域に貢献できる子供たちの育成を図ることを目的とし、平成23年4月1日に発足しました。

三郷市少年消防クラブでは、年間行事に基づき様々な活動を行っており、その中でも軽可搬ポンプ操法を実施したクラブ員たちは模範となっています。

軽可搬ポンプ操法は小学生クラブ員の中から希望者を募り、5月の毎週土曜日から訓練を行い、訓練礼式やホース延長などの特訓を重ね、消防団操法大会や市総合防災訓練、消防フェアにおいて軽可搬ポンプ操法を披露します。

消防フェアや出初式など多くの人が集まる場所では、少年消防クラブ員の活動が目に見えることにより、市民への防火・防災意識の向上、普及啓発に寄与しています。また、その時の活動を見て、クラブ員に憧れ入団する子供も多く大変うれしく思います。

軽可搬ポンプ操法を経験したクラブ員たちは、少年消防クラブ交流会（全国大会）に出場し、「平成27年度 優勝」「平成28年度 第2位」と優秀な成績を収めることができ、後輩クラブ員たちは「次は自分たちが頑張る番だ！」と意気込みをもって活動しています。

また、このような経験を積んだクラブ員は、高校生になり今では準指導者となり後輩

クラブ員を積極的に指導にあたってくれるので大変心強く思います。

三郷市少年消防クラブでは、その他にも年間を通して色々な訓練をしています。指導にあたりメリハリのある訓練を心がけています。子供たちは集中できる時間が限られていますので、訓練プログラムを45分程度を目安に作成しています。また、訓練のあい間には、馬跳びや駆けっこなどの遊びも取り入れ、楽しみながら訓練指導を行い、訓練の始まりには「集まれ」終わりには「わかれ」と区切りをしっかりとすることによりメリハリのある訓練ができていると感じています。

少年消防クラブ指導者研修会に何度か参加させていただき、全国の指導者の方々と交流ができました。県外宿泊研修において実施しましたクロスロードは、問題に対して様々な意見が飛び交い、大変有意義な研修を行うことができ、今後も全国の活動を参考に取入れて取り組んでいきたいと思っています。

最後に三郷市少年消防クラブを巣立っていったクラブ員には、今まで学んだことを活かして、地域や社会に貢献していただきたいと思います。

## 東京都調布市調布消防少年団

### 調布市消防団員 馬部純一郎

調布消防少年団に小学生のときに入団してから始まった私の消防人生も、間もなく四半世紀を迎えようとしています。

私の家は辺り一面が畑と田んぼだったころから調布に住んでおり、消防組から現在の消防団に至るまで、各世代で地域防災に携わってきました。もちろん私の父も調布市消防団員として活動していたこともあり、小さいころから「消防」と接することも多かったことから、小学生のときに入団し、中学生では指導団員になりました。中学校の卒業と共に消防少年団も卒団（当時は中学生までが団員の対象）しましたが、何の迷いもなくそのまま活動を続け、高校生で準指導者となり、その後は指導者として活動を続けています。

普段の活動は、団員の心構えを示す「七つのちかい」の唱和、東京消防少年団歌「素晴らしい仲間たち」の斉唱、東京消防庁の職員が実施しているものと同じ「消防体操」をしてから、活動の基本である規律訓練を行います。活動は月に2回、1日3時間という限られた時間を有効に活用するため、団員達には「気をつけのできる子」を目標に指導をしています。伝達事項が1回で伝わるように「聞くときは聞く」、次への行動が早くできるように「動くときは動く」、そして、号令がかかったら背筋をまっすぐに不動の姿勢で立てるように「動かないときは動かない」という「気をつけのできる子」を目標にしています。でもときには息抜き「遊ぶときは遊ぶ」も大切に、一緒に走り回っています。

東日本大震災直後の4月から私も調布市消

防団員としての活動が始まりました。そして、火災の他市内の様々な災害に出場しました。このなかで感じたことのひとつは「自分の命は自分で守る」ということです。何も知らない何もできない状態で災害へ出場すると、怪我をしたりさせたり、機材を壊したりする恐れがあります。そのために知識と技能を身につけ、まずは自分の命を守る為に訓練をする、それから災害で活動するための訓練をする、ということを感じました。もうひとつは「他の人は助けてはくれるが守ってはくれない」ということです。何かが起こったときに助けを求めれば他の人は助けてくれます。通報をすればすぐに駆けつけてくれます。しかし、今何かが起こしようとしているときに他の人は守ってはくれない、守るのが困難、ということを感じました。なかなか団員達には伝えることが難しい内容ですが、何かのときの為に分かってもらえたらと思っています。

指導者になってから15年以上が経ち、多くの団員達が卒団していきました。しかし、東京消防庁の職員になってくれた団員がいます。調布市消防団員になってくれた団員がいます。成人して指導者になってくれた団員がいます。様々な形で卒団した団員達が「消防」を続けてくれています。私の消防人生もまだまだ先が長そうです。

# 愛知県豊田市竜神中学校少年消防クラブ

## 教論・女性消防団員 杉浦 友香

私は、竜神中学校着任前に、豊田市消防本部の音楽隊で、防火・防災意識の普及・啓発活動、予防課で予防指導員として、小中学校の避難訓練の指導等に携わりました。

この経験から防災教育の大切さを感じたことから、直接、教育現場で防災の大切さを伝えたいと感じ、中学校教諭となりました。

また、「防災教育」を特別なものとして捉えたり、一過性な防災教育ではなく、普段の授業の中で、学び体験していくことが重要であると考えました。

私は、中学校に赴任し、吹奏楽部の顧問となり、赴任前の演奏活動をしていた経験から、音楽を活かした防火・防災の普及啓発活動を地域のイベント（地域の竜神交流館ふれあいまつり、竜神防災フェスタ、交通安全・防災フェスタ、産業フェスタ等）に部活動の一環として演奏活動により参加、同時にボランティア活動も行いました。

生徒たちは、演奏しながらのパフォーマンスに、聴衆が音楽に合わせて手拍子をしたり、涙を流してくれる喜びを知り、吹奏楽部としての演奏活動がいかに大事であるかを知ることができました。

また、地域の住民に対しての活動を行うことで、地元の小学生らがイベントや演奏に身近に接することができ、竜神中学校で吹奏楽部に入部したいと言われ、入学後は、これらの活動にすぐ馴染むことができ、これが地域へとつながり、竜神地区の地域防災力向上へ貢献することができたと感じました。

生徒たちは、自らがアイデアを出し合い、防火・防災に対して、観客がいかに興味をもってもらえるかを相談し、工夫を重ねながら練習をし、改善をしていく姿が見られるようになってきました。

豊田市内で多く活動することにより、竜神学区以外の地域からも注目され、地域と協力した防災活動を広げるきっかけとなりました。

生徒たちが、地域の住民とともに炊出し訓練等のボランティア活動を行うことにより、生徒自身の防災に対する意識向上を図るとともに、地域の方たちに対しても、防災の意識向上の手助けとなり、地域の方々との繋がりを構築することができました。

部活動として防災活動をすることで、部活の伝統の一つとなり、先輩から後輩へと引き継がれるようになりました。こういった活動を通じ、地域密着型の学校での「防災教育」には「地域」が重要な要素であることを認識することができました。

「地域」の協力を得るために、地域の防災の要である消防団の協力をいただきながら、防災教育を行うことを考えました。

勤務2年目からは少年消防クラブの担当にもなり、学校全体の防災教育に携わることとなりました。

春には、地元消防署と、搬送法訓練やトリアージ訓練などの集団救急を中心とする合同訓練を実施しました。本番さながらの状況を体験した生徒は、避難訓練の大切さを実感

し、日頃の訓練が災害対応に役立つことを学ぶことができました。秋には、地元消防団や竜神地区避難所運営班の協力を得て防災訓練を実施しました。消防団員による指導では、生徒が消防団を身近に感じることができ、消防団活動を知るきっかけとなりました。

他にも体育の授業の一環として、着衣泳や普通救命講習受講、特別支援学級では、消防団による防災パネルシアター鑑賞をし、災害時の行動を学びました。

これまでの経験から、教員の防災に関する知識向上と学校全体の協力体制の構築が不可欠であると考えます。それが、日々の教育活動の中で防災教育を行うことができ、多くの

少年消防クラブ員への防災活動を広げるために重要でもあり、今後の課題でもあると思います。さらに、災害時にスムーズな活動ができるよう、防災活動だけではなく、さまざまな地域行事へ積極的に参加し、地域との顔の見える関係を築くことが大切であると思います。

最後に、竜神中学校の生徒を指導され、また地域のために活躍している消防団員の姿を目標に、竜神中学校の生徒たちを、音楽を活かした吹奏楽部の活動等通じて、これからも防災教育を進めていきたいと思っています。



# 福岡県新宮町相島少年消防クラブ

## 教論 白澤 徳教

### 相島少年消防クラブ活性化

#### 1. 「相島BFC」のあゆみ

1948年（昭和23年）創設69年の伝統を誇る「相島少年消防クラブ」です。

相島分校に入学後、入学生と在校生全員で「相島少年消防クラブ」入団式を行い、島内の区長や水上分団長の方々から消防クラブ員としての心構え等を学び、日々の活動に全員一丸となって様々な活動に取り組んでいます。

創設当初は、島内の「防災・防火」活動が中心で、毎週月～土の「夜回り活動」全員が分担して島全戸を夜回りし防火意識の向上に取り組む活動を精力的に現在まで続けています。

#### 2. 約20年前からの軽可搬ポンプ操法

軽可搬ポンプの寄贈を受けて、粕屋北部消防本部をはじめ地元の水上消防分団の方々から、規律訓練やポンプ操法訓練を受け、島の運動会や町の出初式での演技披露を行い毎回絶大なる賞賛を受けて現在に至っています。（他地区BFCの視察も多い。）

#### 3. その他のBFC活動

約10年ほど前から、ボランティア活動の一環として島外者に対しての「島ガイド」、環境教育の一環としての「島内のクリーン作戦」などの活動もBFC隊員全員で活動をしています。

\*上記の様に、歴史的に伝統ある「相島少年

消防クラブ」ではありますが、今様々な課題を抱えての活動であることは、紛れもない事実です。BFC活性化につきまして下記に述べたいと思います。

#### 4. 今後の相島BFC活動の存亡について

##### 【成果】

歴史と伝統ある「相島BFC」に相島分校入学と同時に入団し、規律訓練・ポンプ操法・夜回り活動・島外者に対する「島ガイド」・「島内クリーン作戦」などの体験活動により、生徒一人ひとりが精神的に大きく成長し、今後、高校進学で島外に出た時の生活に大きく影響を与えています。

また、相島に対する「郷土愛」が凄く育まれ島の活性化に寄与する事が多くなっています。

##### 【課題】

10年前までは、生徒数が10名在籍していましたが、年々過疎化が進みここ数年に至っては、6・5・7名となり、来年度からは7・6・4・2名と生徒となります。特に平成31年度は4名、平成33年度からは2名となり軽可搬ポンプ操法が活動不可能になる事態になります。伝統ある「相島BFC」の存亡が危惧される事態であります。

##### 【今後について】

平成33年度からは、生徒数が2～3名になり満足行くBFC活動が望めない状況下です。

唯一「夜回り活動」は継続可能ですが、その他の活動、特に「ポンプ操法」活動が一番危惧されます。

今後は、島の運動会や町の出初式での演技披露については、卒業生が在校生との共演を考え、伝統ある相島BFCを継続していく方法を、今後も継続的に考えていく必要があります。

#### 5. 相島BFCにおける各種器材・制服・

BFC旗・活動費等の予算面について

##### 【課題】

現在BFC旗は50年前の旗を使用しています。歴史観はありますがボロボロ状態です。また、制服に関しても10年以上使い回しの状況です。それに器材に関しても同様に古くなっている状況であります。小さな島であり過疎化が進む状況の中で、相島BFCに対する援助等が年々少なくなって来ている状況を危惧しています。やはり、活発な啓発活動自体が困難に成りつつあります。

##### 【今後について】

現在BFC予算は、町や粕屋北部消防本部より年間86,000円頂いていますが、1年間の活動費としては不十分な予算状況です。特

に、他地区BFCからの視察は多数来島して頂けるのですが、相島BFCとして他地区BFCへの交流時の交通費等が工面できなく、伝統ある相島BFCの素晴らしい活動内容を他地区BFCへの普及活動に支障が出ています。

相島BFCは現在までの活動に対し、内閣総理大臣賞（昭和36年、平成28年）2回をはじめ、防災功労者・防災担当大臣賞（平成27年）、全国少年消防クラブでの特に優秀賞（平成26年）、全国環境美化協会最優秀賞（平成26年）、ボランティアスピリット賞（5年連続）、県知事最優秀賞他数多くの表彰を毎年頂いている現状を踏まえ、町役場や地元消防署などに働きかけ、この歴史と伝統のある相島BFC活動を今以上に活発にし、まだまだ、知名度が低く、このような少年消防クラブの存在を知らない人々に対しての啓発活動に邁進させることが、このような青少年活動にとって素晴らしいBFC活動に携わっている者の宿命でもあり義務であると考え、各関係機関や有志の方々への予算増額のお願いや嘆願を、今以上に努力していかねばならない事を痛感しています。

## 長崎県壱岐市山崎少年消防クラブ

### 指導者代表 江口 正弘

当クラブは九州の北西部に位置する玄界灘にある長崎県の壱岐という国境の離島であり、人口は約2万7千人余りの小さな過疎の島です。豊かな自然環境に恵まれ、農業と漁業が主な産業であり、その東南に位置する石田町の山崎地区という50戸弱の集落で活動を行っています。

発足は、大正6年で、山崎地区全体を焼失した大火災がきっかけで、当時の少年たちが夜警の夜回りを始めたのが最初だと言われており、その後、昭和10年に山崎少年夜警団として結成され、昭和51年4月に山崎少年消防クラブに改名しました。郷土愛護の精神と自主防災の大切さを自覚し、自分たちの地域は自分たちで守るという強い信念を持ち、これまで続いた伝統ある夜警活動を受け継いでおり、少年たちが火災予防の重要性を認知して、防火に対する広報活動を行っています。この活動に対し、全国少年消防クラブ運営指導協議会より優良な少年消防クラブとして表彰盾を授与され、平成21年7月には、ヨーロッパ青少年消防オリンピックに招かれ、クラブ員にとって生涯の記憶に残る体験になったことは間違いありません。

現在、クラブ員の加入において厳しいものがあります。離島ということもあり、人口の流出による過疎化は免れません。島内には高校までの教育機関はあるのですが、大学進学では島を離れなくてはなりません。また島内の主産業のほかに仕事がないということで、高校を卒業するとともに島外へ就職する若者も多いのです。クラブ員も現在では中学生3名、小学性1名の計4名という現状です。活動状況も夜警活動を行うよう日々努力はしておりますが、以前よりも活動する回数も少なくなってきました。その理由として、クラブ員の減少とともに、クラブ員の夜警活動時の時間の都合が合わないことが挙げられま

す。伝統を絶やさないためにも、今後どのようにすべきなのか？これが今の当クラブの課題です。

数年に渡り、少年消防クラブ指導者研修会にも参加させて頂いておりますが、他のクラブにおかれましては、活動の内容を明確にし、今後の活動に繋がるような取り組みをされていることに、私自身圧倒されるのが正直な気持ちです。過疎の地域でのクラブ員の加入促進は容易ではなく、私たちのクラブも皆様と同じようにとまでは申しませんが、現在の状況を改善しなくてはということに焦りを感じることも確かです。改善策として、現在の加入対象を少女にまで広げ、当地域外からも加入を受け入れていく方がよいのか。それには賛同いただける協力者が必要ですし、規模拡大での活動日も考えなくてはなりません。また、運営費等々の問題もあり、現状ではなかなか前へ進むことが困難であり、私たちと同じような問題に悩まされているクラブも少なくないと思います。

私自身、地域の消防団員としても活動しているので、今後はクラブ員と消防団員が協力し、活動を継続させていけるだろうと考えています。過疎の町だからこそ、地域と共に活動し合えるクラブを目指し、少しずつ前へ進めたら良いと考えております。

今は、足元をしっかりと見つめ直し、自分たちの地域は自分たちで守るという伝統の夜警活動を今後も続けることで、新しい取り組みが始められるのではないかと思います。

皆様と同様、地域を守りたいという気持ちは変わりませんので、この研修会でご紹介いただいた皆様の活動や実績を今後に生かせるよう、また離島ならではの活動をより強固に継続できるよう、今、当クラブにできることから継続し、活動を行っていきたいと思います。